

も ほう そう ぞう
模倣と創造

会期 2026年7月29日|水|-9月27日|日|

会場 古美術企画展示室



1－① 野々村仁清《色絵吉野山図茶壺》(重文)



1－② 《唐物茶壺 銘「忘草」》



9－① 酒井抱一《日課観音図》(部分)



9－② 伝・源実朝《日課観音図》(部分)

「すべての創造は模倣から始まる」といわれます。人類が生み出してきた「美術」の創造性も然りです。現在我々が美術として扱う全ての造形物には、それを作った人が参考にし、造形要素として採用したであろう過去の産物の面影を、随所に見て取ることができます。本展では、そうした側面に眼を向けてみたいと思います。

福岡市美術館に収蔵される古美術資料の中から、古代から近世・近代にいたる東洋の陶磁、絵画、書跡など11組(25点)の作品を選びました。ある作品と、それを造形する上での手本(モデル)や、何らかの参考にされたことを示唆する作品、あるいは祖型として見なし得る作品を並べます。そして両者の造形的同異点を観察することで、模倣的要素と創造的要素の境界をさぐり、比べ見ることで際立ってくる創造性に着目してみます。

(学芸課長 後藤 恒)

内文として招待客へ書き送ったことが知られています。受け取った一人である松永耳庵〔安左工門〕は歌の意味が理解できず、あやうく鈍翁の誘いをないがしろにしてしまうところでしたが、人づてに歌の意味を聞いて出席の返事をし、事なきを得たそうです(松永耳庵『茶道三年』下・6頁)。

11－① 茄子図

前田青邨(1885～1977) 画
松永耳庵〔安左工門〕(1875～1971) 賛
昭和37年(1962)
紙本墨画・掛幅装 62.3×31.1cm
一般古美術資料 14-B-27

11－② 茄子図

尾形乾山(1663～1743)
江戸時代 18世紀
紙本墨画・掛幅装 20.0×27.6cm
松永コレクション 6-B-37

11－①は、松永耳庵と、耳庵の茶友であった日本画家・前田青邨の合作で、青邨が描いた茄子の絵の周囲に耳庵が「なれ茄子(なすび) なれなれ茄子 なれ茄子 ならずば棚の押絵ともなれ」と力強く書いています。これは耳庵が愛蔵した尾形乾山の《茄子図》(11－②)へのオマージュであることが明らかです。松永コレクションには他に《花籠図》(重要文化財)をはじめ絵画、陶器、茶杓など5点の乾山作品が含まれていることから、耳庵がいかに乾山を好んだかを想像できます。本歌である②は、絵と書がリズムカルな狂歌の調子と混然一体をなした乾山ならではの作風です。それに対し①は、乾山に負けじとばかりに耳庵の書が躍動し、青邨の茄子はそれに押しつぶされそうなほどに、影が薄くなっているようです。

鈍翁は、この三斎の歌を用いて、自身の茶会への案

月にかけて1日1幅ずつ計33幅の「日課観音」を描いたことが、②に付属する書状によって判明しています。その目的は、敬慕する尾形光琳・乾山を追善することであった蓋然性が高いことも指摘されています。

9－①はその33幅の内、複数現存する作品のひとつです。前述の経緯からして、描画にあたって9－②を手本にしたことは確実といえますが、肥瘦を活かした筆線は②のそれとは異なる趣であり、確かに抱一の画技の特長を伝えています。

10－① 細川三斎・沢庵宗彭贈答狂歌 写し

益田鈍翁〔孝〕(1848～1938)
近代 19～20世紀
紙本墨書・めくり 18.1×57.5cm
2025年度 齋藤清様寄贈

10－② 細川三斎・沢庵宗彭贈答狂歌

細川三斎〔忠興〕(1563～1645)
沢庵宗彭(1573～1645)
江戸時代 17世紀
紙本墨書・掛幅装 17.5×41.4cm
松永コレクション 6-I-21

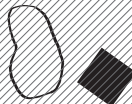
10－①は、三井物産を創始した実業家で近代を代表する茶人であった益田鈍翁〔孝〕(1848-1938)が、自身が所有していた掛軸の書(10－②)を写したものです。②は桃山～江戸時代に活躍した大名・細川三斎と禅僧・沢庵宗彭が交わした狂歌で、居留守をつかって用事を済ませようとした三斎が「るすをつかい人もなきまの我やどへ君きたらばと思ふ何事」と書いて沢庵に送り、沢庵がその余白に「るすをつかひ人もなきやのつれづれをいかにすらんとおもふ何事」と返歌を書いています。親交を偲ばせる両者の筆跡を、鈍翁は忠実に書写していることがわかります。

鈍翁は、この三斎の歌を用いて、自身の茶会への案

List of exhibits

No.	Title	Artist / Produced area	Period / Century	Material	Size(cm)	Accession No.
1-①	Tea leaf jar with design of Mt Yoshino (Important Cultural Property)	NONOMURA Ninsei (?-?)	Japan, 17th century	pottery	H. 35.7	6-Ha-50
1-②	Tea leaf jar with four handles, known as “Wasure-gusa”		China, 15th - 16th century	pottery	H. 31.4	14-Ha-21
2-①	Jar with dragon-shaped handles, white porcelain		China, 7th century	porcelain	H. 37.2	6-Ha-127

No.	Title	Artist / Produced area	Period / Century	Material	Size(cm)	Accession No.
2-②	Amphora with design of Athena and battle scenes		Greece, 6th century B.C.	pottery	H. 42.3	6-Ha-159
3-①	Two cups with two lugs, amber glaze		China, 1st - 3rd century	pottery	L. 10.4	20-Ha-53
3-②	Cup with two lugs, green glaze		China, 1st century B.C. - 2nd century A.D.	pottery	L. 10.2	25-Ha-10
3-③	Cup with two lugs, ash glaze		Vietnam, 1st - 3rd century	pottery	L. 14.3	17-Ha-310
3-④	Cup, decorated in lacquer painting with design of constellation		China, 4th- 3rd century B.C.	lacquered wood	L. 22.2	6-Hb-125
4-①	Jar with animal-shaped ring handles, green glaze		China, 1st - 3rd century	pottery	H. 41.0	20-Ha-49
4-②	Jar with animal-shaped ring handles, ash glaze		Vietnam, 1st - 3rd century	pottery	H. 27.7	17-Ha-309
4-③	Jar with animal-shaped ring handles, bronze		China, 3rd - 1st century B.C.	bronze	H. 33.8	25-Hc-1
5-①	Square jar with animal-shaped ring handles and cloud-mist design		China, 2nd - 1st century B.C.	pottery	H. 32.3	25-Ha-23
5-②	Square jar with animal-shaped ring handles, decorated with gold and silver inlay		China, 3rd - 1st century B.C.	iron	H. 40.5	14-Hc-1
6-①	Tea bowl of tenmoku type	Mino ware	Japan, 17th century	pottery	MD. 11.4	14-Ha-206
6-②	Tea bowl of tenmoku type	Chien ware	China, 12th - 13th century	pottery	MD. 12.0	6-Ha-69
7-①	Ewer of <i>kendi</i> shape with landscape design, blue-and-white porcelain	Arita ware	Japan, 17th-18th century	porcelain	H. 22.3	14-Ha-6
7-②	<i>Kendi</i> with vegetable scrolling design in underglaze iron	Sri Satchanalai kiln	Thailand, 15th - 16th century	pottery	D. 15.5	17-Ha-156
8-①	Hotei, god of fortune, watching cock fighting (Important Art Object)	MIYAMOTO Niten [Musashi] (1584-1645)	Japan, 17th century	ink on paper	71.2×32.7	6-B-29
8-②	Monk watching cock fighting	Traditionally attributed to Liang Kai (12th-13th century)	China, 14th century	ink on paper	78.1×31.4	6-B-1
9-①	Daily drawing of Kannon	SAKAI Hoitsu (1761-1829)	Japan, dated 1824	ink on silk	71.7×24.4	14-B-82
9-②	Daily drawing of Kannon	Attributed to MINAMOTO Sanetomo (1192-1219)	Japan, 13th century	ink on paper	21.0×14.6	6-B-15
10-①	Copy of 'Letter exchange with comical verses'	MASUDA Don'ō [Takashi] (1848-1938)	Japan, 19th - 20th century	ink on paper	18.1×57.5	
10-②	Letter exchange with comical verses	HOSOKAWA Sansai [Tadaoki] (1563-1645); Takuan Soho (1573-1645)	Japan, 17th century	ink on paper	17.5×41.4	6-I-21
11-①	Eggplant	MAEDA Seison (1885-1977); Inscription by MATSUNAGA Jian [Yasuzaemon] (1875-1971)	Japan, dated 1962	ink on paper	62.3×31.1	14-B-27
11-②	Eggplant	OGATA Kenzan (1663-1743)	Japan, 18th century	ink on paper	20.0×27.6	6-B-37



福岡市美術館
FUKUOKA ART MUSEUM

〒810-0051 福岡市中央区大濠公園1-6
TEL 092-714-6051 (代表) FAX 092-714-6071
www.fukuoka-art-museum.jp

出品作品リスト・解説

※記載の順序は、出品番号、作品名、産地または作者名(不明の場合は省略)、時代または国名、世紀、品質、サイズ、コレクション名、所蔵番号、解説としました。

1－① 色絵吉野山図茶壺（重要文化財）

野々村仁清（生没年不詳）
江戸時代 17世紀
陶器 高35.7cm
松永コレクション 6-Ha-50

1－② 唐物茶壺 銘「忘草」

明時代 15～16世紀
陶器 高31.4cm
一般古美術資料 14-Ha-21

作品 1－①は江戸時代前期を代表する京都の陶工・野々村仁清の代表作の一つ。張りのある壺の表面に桜咲き誇る奈良・吉野山の風景が、極彩色の絵付けによって見事に意匠化されています。仁清はロク口の名手と伝えられますが、四つの耳を伴うこの器形のモデルが、**1－②**のような、安土桃山時代を中心に南方から海を渡って伝来した四耳壺であることは明かです。これらは中国南部の産で多くがフィリピンのルソン島を経由して舶載されたことから「ルソン壺」と通称され、日本では茶の湯の葉茶壺として好んで用いられました。焼きムラや歪みを生じた粗悪な品も少なくありませんが、そうした特徴がかえって侘び茶の美意識にかない、珍重されたのでした。

ところで①を詳らかに観察すると、壺の下方、華やかな色絵に隠れるように、ヘラのようなものをグイッとあてて、ロク口の回転にまかせて引かれたらしい荒々しい線が巡っています。上品で華麗な全体の印象にあっては異質で、作為であることは明かです。そこで改めて②の同じ部分を見ると、同様の圏線が認められます。これは紐状にのばした粘土を巻き重ねてからロク口で挽き上げる成形技法の過程で、挽き上げる際の仕上げが不十分なために紐の重ね目が残ったもののようです。仁清は、こうした痕跡のあるルソン壺をモデルとして、その不作為な痕跡に美を見出し、あえてヘラ削りにて表現しようとしたのではないか、というのは考えすぎでしょうか。

2－① 白磁龍耳瓶

唐時代 7世紀
磁器 高37.2cm
松永コレクション 6-Ha-127

2－② 黒絵式アンフォラ

ギリシャ 紀元前6世紀
陶器 高42.3cm
松永コレクション 6-Ha-159

どちらも大きな把手^{とって}を特徴とする器形です。中国・唐時代に作られた**2－①**の把手は龍の形をなし、小さな口に噛みつくように取り付けられています。龍の頭が邪魔をして、口から内容物を出し入れするのは難しそうです。実用性に乏しいこの手の器は、墓に副葬する器（明器）であった可能性が高いとみられています。さてこの器形の起源は、1300年程もさかのぼる古代ギリシャ時代に作られた「アンフォラ」と呼ばれる把手付きの壺に求められます。**2－②**はその一種。アンフォラは本来材料を運搬、保存する容器で、紀元前7世紀頃より儀礼的な目的で制作された装飾的な器が生まれ、②はその一例です。この器形が東西の交易を通じて東洋世界にもたらされ、いつしか首がすばまった瓶の形へと変容し、大きな把手の曲線を龍に見立てた①のような特異な器の誕生につながったようです。

3－① 褐釉耳盃 二口

後漢～西晋時代 1～3世紀
陶器 長10.5cm（各）
森田コレクション 20-Ha-53

3－② 緑釉耳盃

前漢～後漢時代 紀元前1～後2世紀
陶器 長10.2cm
門田コレクション 25-Ha-10

3－③ 灰釉耳盃

ベトナム 1～3世紀
陶器 長14.3cm
本多コレクション 17-Ha-310

3－④ 星宿文耳盃

戦国時代 紀元前4世紀～前3世紀
木胎漆塗 長22.2cm
松永コレクション 6-Hb-125

上から見ると大きな両耳をもつ顔の輪郭に見えることから「耳盃」と称される器です。**3－①・②・③**は紀元前後数世紀の間に、中国とその政治的支配下にあったベトナムで作られた施釉陶器です。産地によって素地や釉は異なるものの、器形とサイズはほぼ共通し、一様に低火度で焼かれた軟質陶です。いずれも実用ではなく副葬品（明器）として制作されたとみられています。

これらの形をさかのぼれば、それより数百年前の中国・戦国時代に作られた木製・漆塗りの耳盃（**3－④**）にたどりつきます。①～③に比べるとずいぶん大きく、平たく作られています。耳盃は本来、汁物や酒を注いで飲むための実用の器で、やがて④のような装飾的な器が副葬品として作られました。状態よく残存するのはそのためです。さらに時を経て様々な材質の耳盃が作られますが、特に量産に向く陶製品は数が多く、様々な器物を象ったミニチュア模型である明器の一種として、多くの出土遺例に恵まれています。④を小型化した①～③も、出土地こそ不明ですが、被葬者の冥界での食生活を支えることを託されて作られたのでしょう。

4－① 緑釉獸環耳壺

後漢時代 1～3世紀
陶器 高41.0cm
森田コレクション 20-Ha-49

4－② 灰釉獸環耳壺

ベトナム 1～3世紀
陶器 高27.7cm
本多コレクション 17-Ha-309

4－③ 青銅獸環耳鍾

前漢時代 紀元前3～前1世紀
青銅 高33.8cm
門田コレクション 25-Hc-1

4－①は中国・後漢時代（1～3世紀）に数多く作られた壺で、胴の両側に環（環状の把手）を啜えた獣面のモチーフ（獸環耳）を貼り付けています。**4－②**はほぼ同時代に中国の支配下にあったベトナムで作られたもので、①とは釉薬の違いの他に、脚が特に大きく作られ、獣面が啜える環が一体化した浮き彫り状ではなく、実際に別に取り付けられるように作られている点が異なります。どちらも、**4－③**のような金属（青銅）製の「鍾」と呼ばれる壺形容器（酒や水を貯蔵し

たとえられる）を模した施釉陶器です。類例の出土状況等から副葬品として数多く生産されたことが知られます。

③に基づいて①と②を観察するに、脚の形状や、前述の獸環耳の作り等から②の方が祖形の形態に近く、①の方がより形式化が顕著です。①のように銅を呈色剤とする緑釉を全面に掛けた作は後漢時代の出土品に多いのですが、艶やかに発色するこの釉薬は、金属器の輝きを模すために採用されたものと考えられています。

5－① 加彩雲気文獸環耳方壺

前漢時代 紀元前2～前1世紀
陶器 高32.3cm
門田コレクション 25-Ha-23

5－② 鉄金銀錯獸環耳鈎

前漢時代 紀元前3～前1世紀
鉄 高40.5cm
一般古美術資料 14-Hc-1

5－①は固く焼締めた灰色の素地に顔料で彩色を施した「加彩」という技法で制作された陶器で、**4**と同様に副葬品として制作されたものです。断面が正方形となるこの形状は、**5－②**のような「鈎」と呼ばれる金属製の壺形容器を模したものです。どちらも当初は四角錐の蓋^{ふた}を伴っていたと思われますが、今は失われています。

鈎の多くが青銅製である中で、②は鉄製になる極めて珍しい遺例です。「金銀錯^{きんぎんさく}」とは金属器の表面に溝を彫り、そこに金や銀の糸や薄片を埋め込む装飾技法のことで、②は鉄の特性によりサビによる劣化が顕著ですが、表面をよく見ると蕨手状の文様を細やかに象嵌した痕跡が認められます。こうした器を模した①の文様も顔料で描いたのみであるため剥落しやすいのですが、長く墓室に保存されていたことで比較的良好残り、器の文様美を伝えてくれます。

6－① 美濃天目茶碗

美濃焼
江戸時代 17世紀
陶器 口径11.4cm
2016年度 一木順様寄贈 14-Ha-206

6－② 建盞天目茶碗

建窯
南宋時代 12～13世紀
陶器 口径12.0cm
松永コレクション 6-Ha-69

口縁の下をやや括^{くび}らせたすり鉢形で、高台を小さく作るこの端正な姿の茶碗を、日本では天目^{てんもく}と呼びます。その語源は、浙江省北部にある天目山。鎌倉時代の日本人禅僧の留学地であったといわれ、彼らが現地で使い日本に持ち帰ってきたという伝承に由来する呼称です。

6－①は日本で作られた天目で、高台内に「瑞源」と朱漆銘があることから京都・大徳寺の塔頭であった瑞源院で用いられたものと分かります。このように国産天目は禅宗寺院の茶礼（飲茶の礼法）に欠かせないものとして数多く作られたのでした。いっぽう**6－②**は、国産天目のモデルになったであろう中国の典型的な天目の一例です。見比べてみると、①の方が全体に丈高く、高台も高く作り、裾に明瞭な段を設けるなどの違いが認められます。量の上で手に取る際の指の掛かりの良さを追求しての「改良」だったのでしょうか。

7－① 染付山水文水注

有田焼
江戸時代 17～18世紀
磁器 高22.3cm
一般古美術資料 14-Ha-6

7－② 鉄絵花文水注（ケンティ）

シーサッチャナーライ窯
タイ 15～16世紀
陶器 高14.0cm
本多コレクション 17-Ha-156

7－①の有田焼の水注は、膨らんだ注口を伴う特異な形をしています。これは東南アジアで「ケンティ」と呼ばれる飲水器の形が基本となっています。**7－②**はその一例で、①より2～300年程前にタイで作られたケンティです。首を握って持ち上げて飲むのですが、注口を乳房形に作ることで水が勢いよく出てくるため、注口に自分の口をつけなくとも飲むことができて衛生的というわけです。そこで改めて①を見ると、首は長くなり、胴は球状に近づき、注口は小さくなって肩部に付着しています。これを同じように持ち上げて注ぐのは明らかに困難であり、実用性よりも装飾性が重視されていることがわかります。

8－① 布袋見聞鶏図（重要美術品）

宮本二天〔武蔵〕（1584～1645）
江戸時代 17世紀
紙本墨画・掛幅装 71.2×32.7cm
松永コレクション 6-B-29

8－② 鶏骨図

伝・梁楷（12～13世紀）
元時代 14世紀
紙本墨画・掛幅装 78.1×31.4cm
松永コレクション 6-B-1

剣豪・宮本武蔵は絵を描くことにも秀でていました。**8－①**は代表作の一つ。二羽の軍鶏が睨み合い、一触即発の様子です。それを眺める布袋の表情は微笑んでいるようで眼光鋭く、まるで闘いの結末を予見しているかのようです。この図案は武蔵が創作したのではなく、それ以前にも存在していました。中国伝来の作品として知られるのが**8－②**です。武蔵がこうした前時代の作を手本にしたことは想像に難くありません。②で闘鶏を眺める羅漢は囊^{ふくろ}を背負っていないことから布袋とは特定できません。何よりも大きく異なるのは、その表情で、じつに朗らかな笑みをたたえていることです。二羽の軍鶏の様子も全く異なります。すでに闘いは始まっていて、バタバタと威嚇しあっているようです。①を描いた武蔵は、鶏同士が飛びかかり合う直前の一瞬の静寂をとらえ、ただならぬ緊張感を表現してみせたことがわかります。

9－① 日課観音図

酒井抱一（1761～1829）
江戸時代 文政7年（1824）
絹本墨画・掛幅装 71.7×24.4cm
一般古美術資料 14-B-82

9－② 日課観音図

伝・源実朝（1192～1219）
鎌倉時代 13世紀
紙本墨画・掛幅装 21.0×14.6cm
松永コレクション 6-B-15

「日課観音」とは、仏道修行の一環として一日一図、つまり日課として観音図を描いたもの。江戸時代後期の絵師・酒井抱一は、伝・源実朝の日課観音図（**9－②**）を文政6年（1823）に入手し、翌年の5月から6